

報



會

會 岳 山 本 日

64

月 二 年 二 十 和 昭

ヒマラヤの登山

英國山岳會のロングスタッフ氏から數日前に、長い手紙を受取った。その中に、ヒマラヤの山のことを記した一節がある。

立教大學の人達が昨年行つたナンダコット登攀のことを記し、同氏がその昔行つたヒマラヤの山のことを色々と回想してゐる。ナンダコットには、一九〇五年に、その登攀を企てたのだけれども、最後の一千呎の所で、雪の状態が非常に悪く、それ以上進むのは危険と思はれたので引返してしまつたとも記してあつた。三十年も昔の話だ。ヒマラヤの老雄の面影が、僅か數行の間に、躍如として浮び出てゐる。

そして、ナンダコットへ登つた立教大學の人達に、會ふ機會があつたらば、ロングスタッフからのお祝を傳へて置いて呉れとのことであつた。近いうちに立教の人達に、お目にかゝれる機會があるかどうかとも解らないので、此の會報の紙面を借りて依頼を受けた傳言を、お取次さしていただくことにする。

このナンダコットの登攀にことよせて、ロングスタッフは、ヒマラヤの登山について、自分の思ふ所を述べてゐる。日本の山岳界にも役に立つことが多からうと思ひ、此處に譯出さして貰ふこととする。

「日本の登山家達が、ヒマラヤに登山するに當り、山の高さなどといふことを度外視した態度を示したことは、此の上もなく立派な見識を示したことであり、非常に嬉しいことである。ヒマラヤには、山として立派な山が數多くある。登山の對象として選ばれべき、優れた山の數も多い。それ等を顧みもせずに、たゞ高さの高い山だけを目掛けて、我も我もとヒマラヤへ出掛ける此頃の風潮は、苦々しくも思はれる。八千メートルの山々へ、大變な數の工夫の群を引きつれて、まるで競争の様に押しかけてゆく様子は、馬鹿げた登山と云ふ他はあるまい。物には順序がある。無益なことを一足飛にする必要はあるまい。此のヒマラヤに行はれてゐる悪い風潮も、原因をせせば直ぐ解ることだが、併しなかなか止むまい。その意味でも、私は、日本の登山家達に、高い見識と、立派な態度を期待して止まない。」

自分達の手で開拓し、今日のヒマラヤ登山界の基礎を築いて來た老雄の一人、ロングスタッフはかう考へてゐる。味はふべき、そして尊敬すべき先輩の言ではないかと思ふ。

世評と風潮に動かされてゆく時世には容れられない言かも知れない。併しロングスタッフの云ふ様に、高い見識と立派な態度を持つた人達には、一の示唆とならう。

之からヒマラヤに足を入れてゆかうとする日本の山岳界にとつて、一

の教訓として忘れずに加えて置いて欲しい言葉と思ふ。

(浦松佐美太郎)

遠征と地學者と背景

立大の遠征隊が送り出された、去年の夏頃のこと、ある地學關係の雜誌に遠征は地學者の專賣特許であるといふやうなことが書かれてあつたやうだ。

しかしそれは前世紀までの考へ方であり、今日では登山と遠征とは密接に結びつけられて居り、地學者及びその他の科學者のみによつて遠征を行ふといふことは今日では考へられない。しかしさうかといふて、遠征の科學的方面を全く無視してよいといふのでは決してない。たゞ、我々の立場から見れば、先づ登山といふことを考へ、然る後に出來得れば科學をも考へたいといふだけである

今から五十年前程前、志賀さんが、「想ふて此所に到れば、西天を睥睨して長吁するもの幾回、誰か吾妻嶽上、瀝く所の鮮血を拉して之れを崑崙の山嶺に瀝く者ぞ」と呼びかけられた相手は、この日本の地學者に外ならなかつた。地學者がこの言葉を實現する機會の今日までなかつたのは、前の論調を對照して今日の地學者は自分のことを棚に上げてゐるやうなものだ、彼等よりも一足先きに、我々がヒマラヤに出かけて行つ

て、コンロンならざるヒマラヤの山嶺に、志賀さんの言葉を「行爲」を以つて示したこと、そして、地學者が「西天を睥睨して長吁」する側になつて了つたことは、一寸皮肉なことである。それにつけても我々の側からのこのヒマラヤへの第一歩は、貴重な實踐であつた、我々はその第一歩が續いて打出される第二歩によつて意義づけられ、是と共に、地學のみならず、科學一般と登山とが隔意なくコンバインされることが望ましい。

餘言ではあるが、ドイツ隊の報告書の邦譯を拾ひ讀みして見たが、ドイツ的果敢とが、ドイツ的豪毅とかドイツ的科學とかの語が、やたらに出てくるのは少からず目ざはりである。

「今度こそは此の巨人を征服し、八千米の山嶺にドイツ國旗を掲げねばならない」といつたやうな氣持と「頂上には何も立てなかつた、半オンスの荷物も我々の負擔を増すばかりだつたので、勿論旗などは持つて行かなかつた」といふナンダデヴィ隊の氣持との間には大きな或る開きが横はるやうだ。遠征に國民的支援を得るためにはこんなドイツ的な氣持も又止を得ないけれども、そうした意圖の下に事を運ぶ事は山登りから見れば又考へるべき一問題である。(黒田)

ナンダ・デヴィの 教訓

田口一郎

人類の到達した最高の頂がカメットからナンダ・デヴィに移つたことは、高きの點では僅か六十一米程の進歩にすぎないが、登山者にあたへる意義たるや仲々それだけのものではないのである。といふのはナンダ・デヴィがエグレスト、カンチエンジャンガ、K₂等の所謂八千米級に互すだけの高きをもたないにもかかはらず、今まであらゆる登山家を威嚇して來たその威容と、登攀不可能とまでいはれたその技術的困難さを以つて、ヒマラヤの大關格としての實録を立派に備へてゐたからであつて、吾々はジョンソン・ピークやカメットの成功に感ずることが出来なかつた喜びと興奮をもつてこの頂の陥落の報知に接したのであつた。

一三九六年の八月廿九日午後三時、オーデルとテイルマンの二人は最後のキャムプを出發して以來九時間の苦闘をもつてこの頂に立つた。過去に於けるこの二人の業績は吾々の知るところである。二人が頂に立つたとき、過去數十年間に亘つて慘敗につぐ慘敗の歴史であつた、ナンダ・デヴィそれ自身をヒマラヤン・ジャイアントの系列に加へることは出来ないかもしれないが、七千米の難峯の成功は八千米の容易な頂に

對する見透しをあたへてくれるばかりではなく、ヒマラヤン・ジャイアントに向ふ際の精神的補助として大きな役割を演ずるに違ひないからである。

更に問題は今までのヒマラヤン・ジャイアントに對する戦ひが、數百人の隊員と「タイガー」達と、數百人の工夫からなる大登山隊によつてなされたのに反し、この英米合同登山隊は僅かのシェルバ人の工夫を連れ、しかも根據地から最高の第六キャムプに至るまでの運搬と建設を殆んど隊員だけの力でやりおほせて而もこの成功を待てゐることにあると思ふ。

登山隊の一員であつた英國山岳會のブラウン教授は、タイムス紙にこの登攀記事を掲載してゐるが、その末尾に附した「將來への教訓」は多くの示唆を含んでゐる。以後簡単にぬきかきして見やう。

「吾々の計畫——小規模登山隊」

吾々か以前から抱いてゐた計畫はヒマラヤの巨峯を手輕な登山隊で試み、且つ登攀の大部分にメンバー自身で當つて見やうといふ點にあつた。最近のアラスカへの諸遠征はこの趣旨で行なはれ、しかも大きな成功をおさめてゐる。ヒマラヤに向ふに際しては高度も異なるし、今迄のヒマラヤ遠征の慣習といふものもあるので、六名のシェルバ人を伴つながら途中ブーティアル人夫は逃亡し吾々は根據地までの道中にさへ重い

荷物を背負はねばならず、更に山にかゝつてからはシェルバ人夫が病氣に倒れ、實際の仕事は文字通りすべて吾々の双肩にかゝつたのだつた。この様に、幸か不幸か吾々の最初の計畫は外來の事情のために否應なしに實現してしまつた。

「大規模な遠征隊について」

以上の小登山隊主義を吾々が抱くやうになつたのは、最近しきりに行なはれる大規模、且つ仰々しい登山隊が、數百人の工夫苦力と犂牛を従へ、萬全の準備をもつてしかもなす處少ない状態を見て、これらの不首尾の原因は、登山隊がか様に大げさすぎる處に胚胎してゐるのではないかと考へたからである。

勿論エグレスト、カンチエンジャンガ、K₂の如き所謂ヒマラヤン・ジャイアントに對しては、經驗ある「タイガー」や人夫の多數を使用し巨峯相應に大規模且つ完全な方法を用ひることが正しいだらうが、カメット、ナンダ・デヴィ或ひはナンガ・バルバットに對してすら、もう少し簡單な方法で試みる事が出来ると思ふ。この程度の頂ならば少なくとも六人の隊員を有する登山隊ならば獨力で登攀することが出来やう。餘り大規模の遠征隊ではむしろ無駄にすぎるのである。

「山登りの純粋性」

大規模な遠征には莫大の費用を要する。この點が遠征隊の單なる量的な大ききよりも重要である。金が

ゝるので遠征は商業化されねばならず、これは登山の純真さを兎角破壊しがちである。吾々にとつては、ナンダ・デヴィが素晴らしい且つ困難な山であればそれだけで充分なのだ。そしてこの點がすべての登山者を引きつける山の魅力だらう。目下の處誰もこの山より高い頂には立つたことがない——こんなことはどうでもない。人類はエグレストではあるが上の高度に到達してゐる「記録」——これも野卑で且つ果敢無いものだ。吾々の求めるものは、登攀それ自身と、その質的の好し悪しである。

「モンズン中の登山」

結局の處、この程度のヒマラヤの巨峯ならばモンズンの最中にでも小規模且つ手輕な登山隊で、多數の訓練された人夫をつれて——或ひは全く人夫なしでもいゝ——成功することが出来ると思ふのである。

以上がブラウン教授の「將來への教訓」である。メンバーの顔觸れ、その素晴らしい活躍、獲ち得た成功から見て、この考へがあなたがち人夫に逃亡されたための負け惜みとは思へない。こういはれて見れば、昨年のフランス山岳會のカラコルム遠征の失敗を始めとして、この教訓が首肯される實例はすくなくない。又ブルース、ロングスタッフ、ケラスを始めとして、ヒマラヤン・ジャイナルの紙面を飾る最近の二三流どころの登攀を一寸思ひ出しただけでも、小部隊がゲリヤ戰術的に陥落させた峯頭の

の數は可成多い。只ナンダ・デヴィともあらうものに、結果論としてもとにかく人夫無しの登攀が成功したことに大きな意義がある。小規模なだけに費用も小額であり、それだけ貧乏人にも機會が多くあたへられるのである。

勿論、この方法も色々論議されるであらうし、我國には參考にならないかもしれない。ジャイアントの數々に苦戰の經驗をもつ登山社會であつてこそ、その歴史の慣習に對してか様に批判を行なふ立場が生ずるのであつて、ナンダ・コットを終つたばかりの我國登山界にとつてはナンダ・コットが正身證明のしかも一番最初のヒマラヤン・ジャイアントなのである。その高きに對しても吾々は外國の先輩の教へてくれた最も安全な途をとらねばならない。だがやがて我國登山界が本物のジャイアントに向ひ、これらの「二流どころ」を二流どころとして取りあつかふ餘裕をもつ様になつたならば、その時にはこの「教訓」を省くことが大いに必要とならう。

第七九回小集會通知

日時 來る三月四日(木)午後六時
場所 赤坂溜池三會堂

立教登攀隊撮影

ナンダ・コット登攀幻燈映寫

ナンタ・コートより

濱野 正男

カトゴダム。カルカツタの俗座を逃れ去つて始めてヒマラヤの山里に到着したなと思はれる處です。朝早く汽車が着く。驛員にドアを叩かれ、あわてゝ降ると今まで二日間唯何んにもない空々々々とした荒野を見て居た私達の目に入つたものは信州の島々に着いた時の様な風景であつた。ヒンヤリする涼氣。森林の丘。深い谷の奥の白雲。石のゴゴゴとした廣い河原。土柳。土手。青い生々した草。涼しさうな木蔭。こゝにはモンスーン中の快晴の日に見舞はれる蒸暑さはない。こゝはもう山の中である。土柳の太い幹や、驛の赤煉瓦の蔭に「リス」が素早い動作で走り廻つてゐる。キョトンとした顔して居て可愛らしい。驛の前のパンガローは立派である。荷が一日後れたので、カトゴダム泊りである。石造の立派なホテルの様な建物で、庭前には草花が植られてゐる。赤いカンナの花は眞盛であつた。ダージリシ、クリー達は各自の荷物をパンガローの石壁に置いて荷を開き彼等の鍋等を持ち出し庭前の林の中で木片を拾ひ集め焚火を始めた。木蔭の下で裸足で草をふみ、草の上に腰を下ろして火を吹いて居る彼等には親みがもてた。日中は暑く、石壁の上を裸足のまゝで歩いて居ると冷くと

ても氣持がよい。アンツェリンにフアンカー（扇風機代りの天井から吊した扇（ムシロ）ノコト）を引かせて晝寝だ。旅に出て山に入つての始めての夜。パンガローを圍む森林は眞暗だ。暗の空に星が澄んでまた

昭和十二年度曆

三月 四日（木）第七九回小集會
三月 十一日（木）第八〇回小集會（關西）

四月 八日（木）有志晚餐會

五月 山岳第一號發行

六月 三日（木）第八一回小集會
山日記發行

六月 十五日（木）第八二回小集會（關西）

九月 十六日（木）第八三回小集會

十月 七日（木）有志晚餐會

十一月 四日（木）第八四回小集會

十一月 十一日（木）第八五回小集會（關西）

十一月 十二月 九日（木）年次會員大會
山岳第二號發行

く。木立から草むらへと螢が飛び交ふ。室には古風な明治時代か、それ以前に見られる様なオランダ渡來のランプを、想はせる灯がともされる。その灯の下で内地への手紙を書くのも一興だつた。少し離れた土人

街の一角から、かすかに哀調を帯びたメロデーが流れて来るし。静かな夜だつた。ダージリシクリー達は石壁の上にゴロ寝だ。ベツトを取つてやらうかと問ふて見ると自分達は何時もこんな處へ寝て居るんだからいらなうと云つて居た。この街の運送屋がしきりに交渉に来る。言葉が分らんと云つて追ひかへしてしまふ。未だ夜印度人と話したりするのが怖かつた。印度人の顔は少し近寄り難いこわい顔をしてゐるからだ。でも馴れてしまふと案外氣だてはやさしいのだ。

アルモラ。ラニケットの英國人の立派な住宅地を通りぬけ、松林のゴルフリンクをぬけアスファルトの自動車道路を走る。アルモラに入る邊より快晴なれば山が見える筈なのに運悪くモンスーン中だつたので何も見えない。マンムの本の中に出て来るベオラからのナンダグアイ附近を望む美しい景には接しられずにしまつた。雨？ 細い雨。土砂降り。モンスーンでどんな雨だか分らぬ。梅雨よりもつとんと雨が降る。こゝのパンガローでダージリシクリー達は馬小屋の隣りにベツトを借りて寝かせてやつた。翌日マルサンは「又明日から、石の上に寝ますよ」と云ひ出した。彼等の手や首には南京虫のくひ跡が一ぱい出来てゐた。「石の上に何年……」その方がいゝのかも知れぬ。アルモラを出て長蛇を爲す一行を見るとやつと、安心した。ク

リー達が未だ何んだか氣が置けてならない様な氣がしてならなかつた。道々アンツェリン、マルサン、トツビゲイ等をつかまへ、日本で教はつて行つた。印度語をズウ／＼しくも、しやべりまくつた。彼もいゝ氣になり一々發音を直してくれたり、又新しい言葉を教つたり、チベツト語では、こう、ネパール語ではこう、日本語ではどうだ、なんて語り合つた。その中だん／＼氣心も分り吞氣な友人を持つた様な氣にさへなつた。マルサンはサーダーだけあり少しこすいがしつかりしてゐる。パゲシュワールに行く日はクリー達がへばつて元氣なく、後れ勝ちだつた。マルサンは途中の橋のたもとで自腹で買つたマンガローの小さい奴を一つづムクリーに與へて元氣をつけてやつて居た。人を使ふ術はなか／＼うまい。マルサンは灰色の古色蒼然としたソフトをかぶつて居た。彼はそれをこれはジェネラルブルースの帽子だと得意がつて、私の手に渡して見せたりした。雨！ 土砂降り。半ズボンに股までズブ濡れた。雨合羽は背すぢまで通り、インチキ、ヘルメットはもう全くその本性を現はしクニヤ／＼だ。

サマデユラ（峠）雨中の行軍。この日は一日中山蛭にいためつけられた日である。峠の少し下に芝生のテント場がある。がしかしその日は池みたくに水が溜つて居てテントどころのさわざア無い。エスコートに頼んだ土人の家の二階。土の家だ。床も土。その土の上に牛小屋みたいな藁が積み重ねられて居る。それが私達のベツトだ。焚火あり。煙つた室うす暗い。日本の山小屋の様だ。カンサマ（料理人）がチャパティをつくつてゐる。ツアンバ（麥粉の様なもの）を盛んにねつて居る。それを覺え様と見てゐると、彼は私の顔を見ながらユーモアのあるヒゲを手の甲で時々こすりながら「水をも少し入れて」なんて云つてくれる。夕暮近くなり雨も上り、眞赤な印度の夕焼を見ることが出来た。雲が谷に静かに下りる。ダージリシクリー達はテント場に食糧品や他の荷物等を積み重ね。そのそばにテントを張つてゐた。食事の煙が細くながびてゐた。

朝。快晴。マルサンは二本 指を口にあてがひ「ビー」と呼ぶ。するとノコ／＼附近の草むらの中のもの立つ方角からクリー達が紐をたづさへテント場に集る。自分の番號の荷物をまとめて背負ひ出す。マルサンはその世話で大變だ。クリー達が皆立ち上り歩き出すと彼はキリ、とした兵隊上りの姿で洋傘を肩に颯爽と歩き出すのだ。彼の頬には刀痕があり太股にも彈痕がある。彼は又それをネパール兵の誇としてゐるのだ。朝の峠の上。始めての峠らしい高い處だつたので雪の山はと、さがした

ツト人の中尉だとか、ブレザーコート様の紺の洋服を着てゐて、絹物のターバンを巻いてゐた。相當えらさうにバンガローに訪ねて来た、が案外良い男で便宜をはかつてくれた。平たい溼地。耕地もある。小学校もある。相當開けた處と云つても良いだらう。バンガローの庭にはヒマラヤ杉が生えてゐる。庭は芝生だ。子供が皆んな私達の顔を見やつて来た品のある少し日本人に似た。いやも少し美しい子供達だ。子供達でも羊毛を紡いでゐる。年寄は何時もしそれを持ち歩いて、歩きながら糸をくり出してゐるのだ。これから先のゴリの谷である。石畳の様な一米位の道だが案外良い。チベットへの通路である故であらう。ジャンダルばかりなのは全く憂鬱になつてしまふ。チベットから羊飼が羊を追ひながら、糸をつむぎながら、下つて来る。カラス歸りの僧侶もオレンジ色の衣を着て下つて来る。皆日焼した赤銅色をしてゐる。道は高捲河沿。密林。ガレ。その上曇つてゐる。雲がたれ込み、谷の奥の見えない處で野營するのだから全くいやになつてくる。このいやな道もマルトリに近づくと何んとなく谷が開け、ジャンガルと草場との境まで来ると一變する。ゴロ／＼した石の道を登り切ると目前に開けたのは長い裾をひいた草原だ。道は石が無くなり土だ。ノール靴で歩くのがもつたない様だ。道の兩側は花が咲き亂れ、

遠く白い羊の群か山へ登つて行くのも見える。羊飼の笛もきこえる風は微風、クリー達も私達も荷を置いて誰も腰をあげない。仰向いで青空に去來する白雲の行先を眺めたり草を取つてみたりしてゐる。全くの別世界だ。それから少し行くと遙かにチベットへの峠、ピングリの峠が見え、ブルブウの奥の山が見える始めて仰ぐヒマラヤの雄峯。傾斜の急な爲か雪崩の爲か雪面に縦にすぢがうんとある。クリー達の荷を背景に見る山の大きさと美しさ。彼等にふみにじられたエーデルワイスは風にゆらぐ。皆夢中で寫眞機を取り出し色々構圖を考へたりした。マルトリも芝生に似た草原の部落だ。高い臺地でその臺地の草原はゆるい傾斜で雪の山へと續いてゐる。岩と雪と草原の境まで羊や牛が登つてゐる。點々とした對岸の白い人家も、青い草原に美しいコントラストを爲してゐる赤く日焼した子供達はテントの周圍に集り空嚙を拾ひ集めてゐる。子供をつかまへ「アツチャ、チヨコラ」「いゝ子だな」なんて云つてやればにこ／＼してはにかむ。ローンの谷に入るとナンダデグリのイーストピークが正面に見える。羊飼の歩いた跡が道の様に残つてゐる。いゝテント場だと思つて行つて見ると羊のクソで土の様に見えただつたりした。ベースキャンプで晴れ上るナンダゴートをじつと眺め入る。とだん

／＼下部の黒い岩壁の上に跳り出た山頂附近は、相像した場所ではなかつた。ナンガバルバートの様な大きな雄大な山だつた。ロングスタッフ氏の寫眞とは違ひ方がひどかつた。それは私達がナンダゴートの本當の懷に來てゐて、うんと仰ぎ見た爲だらうと思ふ。この山の雄大さと、壓力は呑氣に煙草を吸つてゐた私達の心膽を全く寒くさせてしまつた。ロングスタッフ氏は一體何處から登つたんだらうか？ 確に報告には「アノ尾根」に違ひないのだが等と全く豫想に反して悪く見えた。山頂を攻撃し出してから無駄な日数は矢たらに經つて行く。次第にあせり出したり、氣休めを云つたりする。その間は全く苦痛だ。十月五日遂に目的の六八〇〇米級の山頂に立つことが出来たのだ。私は一番殿りをしてゐた私が山頂の雪庇から顔を出した時にはもう堀田さんは元氣に起き上つてゐた。唯一言「これでうまい酒を飲めなぞ」と私に云つて手を握つてくれた。全く長年の計畫が實現したのだ。出發前の目まぐるしい肉體的、精神的の勞苦もこれでやつと實を結ぶのだもの出發前は登らずとも行ける處まで行こうと云つてみたものゝ、船出して日本の山岳界の希望を負ふと、登らずに歸つて何の成功があるか、何の面目があるかと知らず知らず考へてしまふ。もし登らず歸つても何で成功ぢあなんて一パイと來ても何でその酒が飲めよう。私の酒

好きの爲でなしに隊長の一言は私達の心を好く現はした一言だと思ふ。別れは何時も淋しい。私は、それを何度も味はつた。トツビゲが第一テントから病でベースキャンプに下り更にダージリンへ歸つた時の事は生涯忘れられぬ。その日は寒降る日だつた。クリー達に分けた黒い毛布に身を包みビツケルを杖に急なガレの道を二人のクリーに兩方からさゝへられながら下つたのだ。足も力なく黒い毛布に白い雪片が横なぐりに打ちつける。熱い白い息が苦しきうだ。目は皆赤に泣きはれてゐた。翌日エスコートにつれられクリー達に見守れながら私達とお別れたのだ。堀田さんと廣瀬とで彼に給料とチップを與へた時に泣きながら手を合はせ「私がこんな身體になり山へお供出来ないのは残念です。それなのにこんなにいたでいて」と後はもう何んにも云へぬ程であつた。マルサンに肩をかゝへられ、何度もサラームをしながらかつて行つた彼の後のインのかげにかくれて行つた彼の後姿は淋しかつた。カブコツトでトレイルパスを越した時の案内人デワンシンに別れた。彼は印度人にはあまりない實直な老人で私達の便宜を良くはかり、又一錢の報酬もいらぬと云ふ風な男であつた。カブコツトで二日滞在し翌日この老人や随分仲良しになつた村人とお別れだ。バンガローのチヨキダル(番人)のずるさうな顔まで、名残りおしいデワンシ

ン老人は私達が與へた日本の繪葉書を持つて來て私達にサインしてくれと云ひ出した。彼に世話になつたお返しをしてリユックサック。寝袋毛絲のシャツ上下。手袋。ビツケル登山靴等をあたへた。彼もその靴をはいて村人の間を得意がつて見せびらかしてゐた。又ヒマラヤに來て下さい」と手を合はせ何度も／＼サラーム／＼をやつて居た。バンガローを出て村はづれまで見送り私達の姿が見えなくなるまで手をふつてゐた彼の白いターバンも、ビンと張つたヒゲも赤いしぼ／＼した目も、懐しい思ひ出である。

(一九三六・二・一三)

◇

『山岳』三十一年第二號主要目次 (約三百頁の豫定)

兩極探検の思ひ出 白瀬 轟
附) 千島の沿革 同 右
植物の垂直分布に就いて 今西錦司
本邦米河問題の回顧と現狀(中編) 岡山 俊雄
五月の北千島 入江 保太
白馬の南段 田口 一郎
山岳通信の實績 三田 旭夫
飯豊の大又澤 飯沼 潔水
富谷より藥師へ 吉澤 一郎
小館の西壁登攀 京都府醫大
氣象に關する俗信解説 菅原 芳生

◇

松倉ヒュツテと

その近傍

島田 武時

この角川水源地にある松倉ヒュツテに入つたのは暖かい冬に珍しい日だつた。

大浦の村はずれに車を捨てた私達は鉢の部落から、今は無人の部落、河原波への小さな峠と、河原波から春日の部落への峠路の腐つた雪に困りして最後の峠（五一七米突）に着いた頃は既に暮れて居た。富山の山々の谷から送電の鐵塔が山を越へ野を渡つて文化の源泉を都へへと送る。それと共に山間の人々は次第に野に街に出て行き今や再び人の歸らざる無人の部落、無人の家が至るところは見るのは珍らしいことになつてしまつた。峠に老人あり。春日の達兵衛と名乗る。持前のどんな好奇心から彼の手に持った除雪具はこの地方でなんと呼ぶかと尋ねる。これは「バンバ」小さいのを「デコイスケ」輪カンデキはたゞ、「カンデキ」等と呼ぶと云ふ。「デコイスケ」とは越中平野地方の子供の雪遊びに用ふるもの、子供等は之を「バンバ」とよぶものと同じである。貴方は何處から来たかと尋ねる。富山からと云へば、富山は良いところですねと感に堪へたごとく呟く。かつて木曾義仲（平家の落武者でないところが良い）松倉に駐

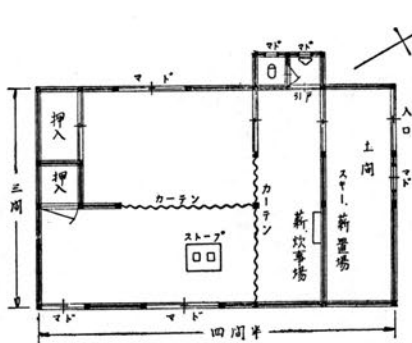
したところ松倉は千戸の家を数へたと云ふ。その頃このあたりに盗賊すみこの峠にて徳平なるものを殺した。

よつてこの峠を徳平殺しの平と呼ぶさうである。ついで達兵衛氏は貴方は盗賊つまり盗人をなんとお呼びかね道襲されたのには聊か驚いた。

松倉への道はこの峠を下り角川谷に入つて溯行するものと、この峠の稜線を沿ふものとあり、多雪のときは後者をとり積雪少なきときは前者をとるこの谷は悪く志賀高原の幕岩の如きところ數ヶ所あり降雪中は不安である。

松倉の部落は今三戸を残すのみ、そのうち人の住めるは一戸のみ、曾つて千戸の部落と云ふもこの谷、この谷の上部に在る臺地、木曾平と呼ばれるものを加へても千戸の收容餘地はない様である。傳説は何時も愉快である。

この部落の特徴は各戸に谷川を引き幅一間乃至一間半の小川をコ字形に家の周囲三方を流して居る事である。家の周囲に積雪を置かない方法ときくが、木曾義仲の末裔連中のこと故、濠の積りか、或は手輕な曲水の宴位は張る用意かも知れない。さ



もあらばあれ、この農民ゲテ物展の会場にも使用さるゝ如き建物が一戸たつた三十間に賣賣されるとは通貨膨脹時に於ける驚異とも云ふべき夕方闇の中を松倉の部落を過ぎ、スキの下にきしむ雪をたのしみながら、ヒュツテに入る。松倉ヒュツテはこの部落の上部、立派な杉並木のはずれにあり、良き位置を占める。（松倉ヒュツテは筆者の假稱、名稱はまだなく目下考

慮中の由近き將來寮として名稱を冠して發表されるであらう。）ヒュツテ建設の由來は、かつて魚津の人、萬又六氏この地に牧場を拓き、その事業中止以來捨てられてあつた牧場番小舎を昨年度に至つて、富山縣立滑川商業

スキー山岳部が借受け、大改築をなしたものである。學校にては今後學生の訓練の道場として大いに利用する由。故に所屬は萬又六氏、管理は後者がなして居る。小舎は快適、夜間も温度六十乃至七十度に保つて容易である。小舎内部に天井を張れることは保温、特に床上温度を高めるに大いに役立つて居る。多くのスキーヒュツテの如く收容人數を大にするために作る屋根

裏利用の二階又は中二階の如き階上温度と床上温度の著しき差のあるの一考を要する。

床は板、藁を敷き次に藁を最上部に疊表を敷き。窓は硝子張り、外部は板の引違ひ鐵戸、夏期はこの鐵戸を取はずして窓を大きくすることが出来る。

室内にカンバス製カーテンを垂し、小人數の場合に於ける保温に考慮を拂つてある。（圖面参照）備品は未だ全部揃つて居ないが北海道より取寄せたストーブ、松倉最後の主人金子老の作つた素敵な藁の深靴二足珍らしい魚版木なんか柱にかけてある。流石クラブヒュツテ、鯛とキスの目ざしが一間許りの長さにとほしてきけてあつた。

チュツテより牧場を横切り、一〇八四mと一二三八mのピークを結ぶ稜線に達するに三時間餘りを要する。この稜線上より深い片貝の谷を隔て、毛勝岳の雄姿と直面する。

又積雪多きときはこの稜線より片貝の谷の諸部落に滑り下ることも出来る。ヒュツテに入つて二日目の朝、早朝よりの南風にヒュツテ附近の積雪は急激に軟雪化したのが稜線附近は雪質よく、木々に樹氷つき居る。牧場一帯はよき降斜面である歸途は角川谷を忠實に下り古鹿鹿、宇都呂を経て再び小さな峠を越へて早月川に出で大浦より車上の人となる。

ヒュツテは公開してないが便宜はかつてもらへると思ふ。ヒュツテは使用しなくとも松倉の金子老の宅にも厄介になれる。

松倉最後の住人金子老夫婦もまさに離村せんとして果さず、近年に至つては時代の波にのつて繁く訪れるスキー登山家、又は昔の金礦を目指して再び角川の谷々を土龍の如く穴を掘る黄金狂者達を眺めて胸中松倉千戸の夢を描いて居るかも知れない老夫婦二人餅をついたり、石臼を廻して居るのを眺めると感慨無量なものがあると云ふ。格別病氣もしないが春になつて食糧が豊富になると矢張り身體を悪くしがちだと云ふ。米は谷間の田圃に二人に必要なだけを作ると云ふ。

有峰まきに湖底に沈まんとする時代松倉に幸ひせんことを望む。松倉ヒュツテに至る登路は四つある。早月川河岸大浦にて下車、鉢の部落より河原波、春日を経て角川に入るもの。魚津より忠實に角川を溯るもの。大浦より大鹿、古鹿鹿を経て春日に入り第一に合するもの。早月川の虎谷を溯るものである。積雪期に多く第一、第三が探られ。夏期は虎谷入り最もよきものと考へられる。魚津より入るものは道長きも峠がない。虎谷は積雪期には大トラ小トラのとび出す懸念多く積雪安定せねば危険である。魚津よりするもの以外何れの登路よりするも大浦よりは五六時間の行程と考へられる。

◆會員通信◆

野澤の今昔

今年は久振りに會社の連中のお供をして野澤温泉へ行つた。學校を出てからも二度許り行つたが一度は雪のつもな六月の事、二度目はその翌年の冬家内を連れてスキーに出掛けたのだがそれからもう足掛八年になる。酒屋のおちさんやおばさんそれから馴染みの深い色々な人達はどうしてゐるだらうなど考へていつも冬になると一度は野澤を目的地の一つに數へ上げるのだつたがまだ温泉スキーに涵りきるやうな年でもなし僅かな休みを有効に使ふやうな意味から遠足は大きな山のある方へと向いて了ふのであつた。

今年は新會社へ轉じた最初の冬でもあり旁々皆のスキー振りの話の種に見て置き度いと思つて殊勝にもうづく心を押しながら野澤行とはなつた次第である。

元旦の夜の爲めでもあつたのか汽車の混方は毎度の事ながら大したものであつた。雲霞の如きスキー客に對して臨時列車がなんとたつた七輛しか連がれてゐない。これではスキーを擔いだ儘あらぬユートピア行きをやる人も出るといふものだ。兎に角席をとらうとするあのスキーヤー達の眞剣にして悽愴な顔々々を見るに泌々貧乏人に生れて來た事が情なくなる學生時代には日曜を利用する

にしても土曜の夜行なんかは敬遠してその前の日に出發して丁度。今ではそれが出来ない。サラリーマンの悲しさだ、けれ共野澤は云ふまいぞ、カード階級の六十萬も居るといふ中から曲りなりにも高いお金を使つてわざ／＼信州くんだりまで板ツ切れを滑らせに行くなんてこんな選ばれた幸福者が又とあらうか、難行苦行は世の常の事近頃では一晩位の徹夜に匙を投げてゐたんで決してスキーは出来ぬ。せい／＼苦勞して行く事だ。

飯山鐵道は相變らずストーヴが眞中に一つあるだけ、夜も明けぬから眞暗であるのだが電燈もつけない。省線にならなかつた腹いせが飛んだ所へ來てゐる譯だらう。千曲の流れを窓下に眺める頃になつて間もなく汽車は野澤温泉驛に着いた。上境が野澤温泉と名前は變つても驛とその附近の有様は昔の儘だ。顔見知りの人夫がまだよく私の顔を覚えてゐて私達の荷物を温泉まで持つて行つて呉れる事になつた。此頃はバスが通ふやうになつたので荷擔ぎの人夫は上つたりらしい、私達は昔の通り荷を人夫に頼み歩いて野澤へ向ふ事にする。あの雪の厚く積つた千曲の岸邊に立つて「オーイ、叔父さん、舟を頼むよ」と暇鳴つた事も昔の夢でしかない、此の頃ではバスさへ通れる船橋がかゝつてあの寒空にピンピンと響くやうな渡し舟の針金の音も聞く事は出来ない、千曲渡れ

ば野澤のいで湯……もうあの穢らしいバスで行つたんでは何の情緒もありはしない。

坪山の部落を過ぎて山の鼻を一曲りするともう野澤へ來た様なものだ。初めての人は遠いが慣れた者には割合近い、懐しいシャンツエの屋根や鐵索の尾根が見えてやれ／＼と思つた時にはもう湯の街へ這入つてゐる譯だ、大湯の角を曲つた所が私達を育て、呉れた酒屋である。南大山岳部合宿所の他に明大の分の看板もぶらさげてある。之は此の宿のT坊といふのが飯山中學校から明大へ行つてスキー部に這入つた爲めだらうと思ふ。吾々の仲間では今だにT坊だが先日のスキー年鑑によると留守軍とは云へジャンプ競技に優勝してゐるのだからもうT坊でもないかも知れない。あのT坊が今年は學士さんになるといふのだから私達が年をとるのも當然だし野澤のスキー場がおつたまげる程發展するのも無理からぬ話である。

吾々が學生時代に一々説明するの煩を避ける爲めにつけたABCの各斜面は宛ら夕方以後の錢湯のやうな混み方である金塊泥棒が逃げ込んだりスキーやストックを失敬する人種の爲には最も格向な場所ではあらうが初心者向とは決して云へない、林間滑走にならぬ人間滑走ぢや除ける技術は何も知らない人達の悲鳴は無理もないと思ふ。吾々が百姓一揆の竹槍然とした單杖とアルペンスキー

とかいふのばしたり縮めたりする荷札のやうな薄い金具仕掛けのあのスキーを飯山中學校から借りて滑つた頃を思ふと兎に角スキーといふものゝ普及振りに驚嘆の外はない。

鐵索の尾根がシュナイダーの滑走以來シュナイダースロープと呼ばれその下の前に小山のある所をを田部さんがユートピアと書いてからそれがそのまゝ通用するやうになつても私のつけたABCは相變らず吾々の仲間だけにしか通らない。何だかそこに學生群と一般大衆といったやうなケジメが感ぜられるやうな氣がしないでもない。

上の平の端に立派な小屋が出來、そこから鐵索の尾根上にある一本杉の直ぐそばまで大きなスキー用の切開けが出來て毛無山のあの摺りちゲレンデに大きな穴がボコ／＼あくやうになつたんだから十年前に吾々が毛無山へ行くととなつた宿のおばあさんが神佛に手を合せて無事の歸宿をお祈りした事などは全く以て馬鹿々々しい昔語りになつて過ぎなくなつて了つた。

野澤は變つた、全く變つた、でも私達のスキーを育て、呉れた懐しい昔の人達の生きてゐる限りいつまでも冬さへ來ればあのいで湯とシャンツエの急スロープに遠く思ひを馳せて學生時代の無邪氣な思ひ出を胸にいだき續ける事であらう。

(一一・二・一〇) (吉澤一郎)

「富士山大澤口合宿」報告

多人數による積雪期高所露營を一つの目的として今年の冬季合宿を富士山の大大澤口で行ひました。時日に制限があつて、氷雪に包まれた素晴らしい大澤の壁を思ふ存分登る機會は持ち得ませんでした、入山後一週間比較的天候に恵れ、富士の新しい感觸を味ひ、愉快な山の生活を送る事が出來ました。

私達は大澤の中道お助小舎を根據地として、大澤右岸の尾根(約三、六〇〇米)に二張りの天簾を張り、した天幕地は頂上迄(飢ヶ峯觀測所)一時間足らずの地點で、比較的風常りも少く、然も眺めは中腹の中で一番ではないかと思はれる様な所です。天幕地點の登降路は大澤より向つて左二本目の澤によりました。

今年は富士西面も雪少く、スキーは持参しましたが全然使用する機會はありませんでした。中道小舎附近(約二、五〇〇米)で一尺内外。澤は大體埋つて居ましたが、處々に大きな岩頭や又風當の強い處は岩肌が出て居ました。それでも下山する頃には二度の降雪で、山全體が見違へる程眞白になりました。雪質は森林限界(約二、九〇〇米)附近迄さほど固くはありませんが、それから上は若氷の上に新雪が五、六寸の状態アイゼンに丁度よい固さの爲一度も足場を切る様な事はなく安全に往復

する事が出来ました。斜面は非常に急で、平均三〇度に近いかと思はれます。

私達はアーキティックテント（六人用）とウィンバーテント（四人用）を張りました。暖い年に會つたので寒さに對する苦痛は殆どありませんでした。風も二晩可成り強く吹きましたが、保温性ははるかに劣り、又永い降雪に會ふと埋る危険が多い様に思はれます。

西口は中道小舎から上は道は在りませんが大澤以外は比較的簡單な地形で、アンザイレンの必要はないと思はれます。處々に岩場があり、雪・岩・氷の面白い登攀が味へます。それに大澤の壁は一寸富士山とは思へない姿で我々の登攀欲を唆りました。大澤口は比較的人に知られて居ない登路として今後注意される可きものゝ一つではないかと思ひました。

唯だ此の方面から登るのに困る問題は麓に良い人夫の居ない事です。私達も中道小舎迄の運搬に十名程の人夫を使ひましたが、非常に高い料金の請求を受け大變不愉快な感を受けました。今後此の方面に行かれる方は注意を拂はれる必要があると思ひます。

最後に私達の日程を簡単に記して

報告を終ります。

一月二日、先發隊四名。朝東京驛

發—富士—大宮町—

（トラック）—上井出

村—出水—（隊員徒歩

荷物馬にて運ぶ）—

十番。

一月三日（晴）先發隊人夫十名と

共に中道小舎往復 約

七時間

本隊（八名）東京發

夕刻十番着。

一月四日（晴）全員（一二名）人

夫一名と中道小屋に向

ふ。約五時間。

一月五日（晴）隊員十名天幕建設

に登る。天幕地迄約六

時間。六名滞在、四名

中道小舎に下る。夜半

より風激しく、ガスが

かゝる。

一月六日（曇風強し）本日晴天な

れば第一隊登頂し、第

二隊と天幕宿泊の交代

の豫定なりしも悪天候

の爲滞在、午後第二隊

小舎より天幕に來る。

全員宿泊す。

夕刻より吹雪となる。

一月七日（晴、風強し）全員登頂

正午觀測所に休憩。第

一隊小舎に下る第二隊

天幕に宿泊。

一月八日（曇後晴）第一隊撤收の

爲天幕地迄登る。第一

隊大澤壁途中迄偵察。

午後天幕撤收。夜半降

雪あり。

一月九日（曇）二名下山、他は全

員中道小舎滞在

一月十日（晴）全員下山、出水よ

リトラック便用 夜歸

京。

（東京帝國大學山岳部渡邊記）

正月スキー合宿

正月は勤人の私にとつては五日間

の休日貰へる絶好のスキー祭日で

ありますがお嬢様達にとりましては

却て出悪いとかで「此度行くわよ」

等と暮から約束をしたもののいざと

なると色々の差支が出来て今年の正

月スキー合宿は片手に満たない小人

数となりました。

新潟の初員Sさんと松本で落合つ

て鳥々行きの電車に乗換へて初めて

YW山岳會員と吾等のスキーコーチ

チャー福岡先生が席を列べられ、乗客

に氣を兼ねながら朝食を車中ですませ

て乗鞍へ向ひました。

乗鞍は故三田姉妹と因縁の淺くな

い山でありますし年中誰かしらが出

掛けてゐますので初めて會ふ鈴蘭や

冷泉の小屋の主にも親しみを覺えま

した。思ひの外に親切にもてなして

呉ましたので嬉しいやら、恥しいや

らで少し恐縮しました。

最初の日には鈴蘭宿りを餘儀なく

させられました程、お山は繁昌でし

た、仕方がありませんので金山スキー場やその向ひの斜面で先生に全制動やボーゲンの間違を矯正して戴き、夕方寒く成ります迄一同は熱心に練習を續けました。

冷泉小屋では先客のある部屋へ割り込ませて貰ひ、豫約をしました肩の小屋を斷つて、小屋附近又は鶴ヶ澤邊で毎日猛練習を致しました。先生はお若いのに似ず。出来ない人達の氣持等を、斟酌し様々と面倒を見て下さいましたので一同は大變に有益な又嬉しいスキー合宿を致す事が出来て感謝で御座いました。

殊に三日には先生の後輩達が多數見えられ、夜になると彼等にお茶を作つたりし（その賞紅茶一切を忘れて來た私共が飲み度ので）一緒に彼等と歌などを歌ひ又茶目振りに呆れ惡戯に感心しました。

なにしろ若い彼等の喚べるのには驚きました。多分此の位で間に合ひ相だ」などと自分達を標準にサンドイッチを皆の分迄作り、スूपや紅茶を暖めて、テレモスに入れて、ゲレンデへ運び、いざ食事として練勢十三四人が一團となつて立ち列びますと、

「それ、鶏のサンドイッチ」
「ほら、野菜と玉子のサンドイッチ」

等と次から次へと包が渡されますが終の方は餘り豊富に廻つては來ません。

美味し相に召し上る皆様を見てゐ

ますと、息詰まる様な直滑走も出來ず、又はアイゼンを穿いて、ジャンクと登る楽しみを持てませんでも大いに慰められ、嬉しくなりました。

と申しても、私はグループなりに小屋の内外で充分に愉しく遊びました。先生の言に依りますと「見ちやゐられなかつた私のボーゲン姿勢」が少しは直つた田で、轉び乍らも徐々、術を會得した様に思はれました。

何にしろ毎日九時から夕方の四時過ぎ迄熱心にボーゲンの練習を續け大いに喚べ、大いに笑ひました。私の聲は、小屋の中なら臺所の隅からでも聞こへ、外なら山裾から嶺までも響とか、まさかそれ程でないにしても、兎も角も私は山では無暗と笑ふらしい。

お山は晴れ續きで道の雪は減るが固まるばかりでした。石や笹の出ました道を五日の朝スキーを肩に一同は下山を致しました。陽は暖かく肌は汗ばみ、軒先からは雪霽が落ちてゐました。

丁度不幸があつて大野川へ下つてゐた冷泉の筒木様は私共の車迄見送りに出られ、車の窓から澤山の柿を差し入れて「又來て下さい」と懐し氣にあの顔だらけの笑顔をふりましました。（中村テル）

◆ ◆ ◆



會務報告

圖書基金に就てお願い

本會圖書基金については會員有志の方々の御援助によつて、從來圖書の購入、諸雜誌の整理を行つて参ることが出来たことを本會特に圖書係として深く感謝致す次第であります。

最近に於て一昨年御離出を願つた基金も支出し盡しました上、購入した新刊圖書、整理した諸雜誌の數も増して居りますので、更に篤志の會員諸氏の御援助を乞ひたく存じます。

昨今登山地域の擴大に伴ひ、圖書室備付の圖書の利用は非常に繁くなり、今後とも參考圖書の整備は本會の重要任務の一つと考へられます際、何卒奮つて御援助賜らんことをお願い致す次第であります。

昭和十二年二月 圖書係
追御申越の形成は左の通りであります。

日本山岳會圖書基金申込書
一、昭和十二年度圖書基金何圓也何

口
(但し一口年額金五圓也)
右申込候也 貴 名

日本山岳會御中

右御申込だけを先きに頂き、後日御拂込下さつても結構で御座います

關西支部室來室者數

前回報告後の支部室利用の模様は大體次の通りであります。

月別	會員	會員外	計
十一月	六三	二七	九〇
十二月	二四	二一	四五
一月	四二	二五	六七
	一二九	七三	二二二

なほ右期間中、山岳關係團體の集會に貸與されたるもの關西學生山岳聯盟三回同上B・Oの會合二回のほか奈良山岳會など合計七回。

關西支部室は祭日、日曜、月曜を除き毎日午後五時から八時まで開室この時間外には前記のごとく山岳團體の集會のため貸室の便宜を圖つてゐますから、希望の向は豫め御問合せ下さい。

關西支部藏書新設資金の募集

關西支部では今回支部室の藏書新設擴充を企圖し支部所屬の會員各位に對し大要左のごとく依頼狀を發送して御協力を仰ぐことゝなりました。が、すでにイギリス山岳會雜誌を三木高峯氏より、獨逸山岳會雜誌を高橋健治氏より、フランス山岳會雜誌

を奥貞雄氏より借受け備付けました上、その他の本年度の海外新刊雜誌もぼつぼつ到着し、これまでガランドウのやうであつた室も書棚を増すごとに親しみを加へて來てゐる有様であります。この際、本紙上で重ねて特志會員の御援助をお願い申しあげた次第であります。

拜啓 愈々御清適大賀に奉存候陳者日本山岳會關西支部創設以來格別の御厚配相受けお蔭をもつて支部設置の意義も漸次認められ支部室來訪者も逐月増加いたし居る實情に有之候處支部室は獨り執務集會等の用に供するにとどめず、山岳關係文獻を收藏して研究、調査の便に資し圖書室にも兼用して以て會員各位の利用率を高め度き所存に御座候、然るところもともと日本山岳會において

は新に圖書購入に充當しうべき經費は殆んどなく數年前より「圖書基金」の制により有志の贈金を仰ぎる有様にて、これとても關西支部圖書のために厘毫も剩餘の餘地無之次第にて、かたがた昭和十一年においては、一、二會員の好意によりその藏書の一部を支部室書架に併藏し、幸ひにして會員並びに同好者各位の利用賞讃を得候へども支部の發展興隆のためには支部室藏書の整備につき恒久的の方策を樹立するを緊要と致し候まゝ今次左記により「關西支部室藏書新設資金」を募りたく計劃仕候に就ては右の趣意御覽察成被下何分の御離出相賜度向に失禮ながらこ

ゝに書中をもつて御依頼懇願申上奉候

關西支部藏書新設資金

- 一、一口を金五圓とす
- 二、差當り十二年度山岳關係定期刊行物の購入(主として海外刊行のもの)
- 三、餘裕あるに従つてヒマラヤ・コーカサス等主としてアジア洲の山岳、探検に關する新舊著書に重點を置き購入
- 四、資金の一部をもつて書架その他書籍保管閱覽設備に要する費用を支辨することあり

會員計報

東京市 三輪武五郎氏(昭和五年十

月入會、會員章番號一二四六)
昭和十二年二月六日逝去せらる、本會は茲に謹みて哀悼の意を表す。

新着圖書

ケルン	二月號	同	編輯室
山小屋	同	同	朋文堂
寫眞月報	同	同	小西六本店
ツリースト	同	同	
ジャパン・ツリースト・ビューロー	同	同	
山を行く	創刊號	同	發行所
野鳥	一月號	同	集林書房
地學雜誌	同	同	東京地學協會
國立公園	同	同	國立公園協會
岩波文庫	日本風景論	同	岩波書店

◆會報投稿規定

- ◆原稿締切毎月五日
- ◆原稿用紙は十六字詰のこと
- ◆本號第三頁のやうな斷片的想片、或は會員通信等特に希望致します。
- ◆原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません。原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さい。

昭和十二年二月二十五日印刷
昭和十二年二月二十八日發行

發行所 中屋健次
編輯室 中屋健次
印刷所 多木印刷所
發行所 日本山岳會
電話 芝一六四九番
電話 四谷六五四番

廣告一手取扱